

小中一貫校の 9年間を見通した カリキュラム・マネジメント

富田林市立小金台小学校

Why

なぜ取り組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 国語科と各教科等との連携を通じて、児童の言語能力をより伸ばす必要があった。
- 小中一貫校「彩和学園」の立ち上げにあたり、9年間の教育課程全体を見直して教育活動の質的向上を図り、組織的・計画的なカリキュラム・マネジメントを確立する必要があった。
- 生活科・総合的な学習の時間を核に教科等横断的な視点で再構築する新カリキュラム「未来科」の開発を進める必要があった。

How

どのように取り組みを進めたか（取り組みの概要）

- 小・中学校でめざす子ども像を共有し、そこから導いた「つきたい力の構造図」に基づき、授業や単元等において大小さまざまなPDCAサイクルを確立するよう図った。
- 「4・3・2制」の導入や中学校教員の小学校への乗り入れ授業の実施、学園協議会の設置、学園アンケート等、学園システム全体の改善・構築を進めた。
- 「未来科」でつきたい力を教職員が共有してグランドデザインと9年間のカリキュラムを策定し、PDCAを回して実践を進めた。

Change

どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- ゴールにつながる「めあて」の設定、「ふりかえり」での学びの見取り等、逆向き設計の授業づくりを学校全体で共有することができた。
- 学年間の交流の拡がりにより学園としての一体感が高まり、児童生徒の自己肯定感が向上した。また、保護者・地域の学園・子ども理解が深まった。
- 児童が国語科等で身につけた力を活用できる未来科のよさを共有できた。また、教職員全員でアイデアを出し合って9年間を見通した新たな取り組みを開発し、カリキュラムの改善を進めることができた。

1. 国語科を核とする言語能力の育成

(1) これまでの取組み

令和3年度より、小・中学校でめざす子ども像から導いた「つきたい力の構造図」に基づきながら、これまでより国語科を中核として、言語能力の育成をテーマに授業研究を進めてきた。研究授業においては、討議会で見出された成果と課題を丁寧に整理し、次の授業改善につなげられるよう、PDCAサイクルを意識しながら取組みを進めた。

また、普段の授業でもPDCAサイクルを回すには、授業の成果と課題を見取る必要があることを共通認識し、「ふりかえり」の活動を授業の見取りの場面として設定した。

そこで、本時の「めあて」に対する「ふりかえり」でどのような学びの変容・更新・新たな気付き・疑問が書かれているのかを検証することで日々の授業改善につなげた。



	前期	中期	後期
とりいれる力	きく よむ	きく よむ	きく よむ
カタチにする力	みとおす あつめる えらぶ	みとおす あつめる えらぶ	みとおす あつめる えらぶ
つたえあう力	はなす かく	はなす かく	はなす かく
今を生きる力	みつめる つなげる	みつめる つなげる	みつめる つなげる
	わくわく わかる できる	じっくり なぜを つかむ	ひろく ふかく えがく

9年間の構造図

		前期 (小1～小4)	中期 (小5～中1)	後期 (中2～中3)
とりいれる力	きく よむ			
カタチにする力	みとおす	わくわく	じっくり	ひろく
	あつめる			
	えらぶ			
つたえあう力	くみたてる	わかる	なぜを	ふかく
	しあげる			
今を生きる力	はなす	できる	つかむ	えがく
	かく			
	みつめる			
	つなげる			

構造図が細分化されすぎたため、文言を簡略化し、焦点化した構造図を作成した。

前期(小1～4年)、中期(小5～中1)、後期(中2～3)の3つの期別につきたい力を整理していった。

「ごんぎつね」本時の目標:話し合いを通して、ごんの思いの変化に気づき、そのことを自分の言葉や文章で表現できる

㊦ ごんの「思い」の変化を考え、気づいたことを書こう。

後悔・責任・償い→気づいてほしい

○最初は自分がうなぎを盗って、兵十に「ごめん」という気持ちでうなぎや松茸を置いていったが、今は、同じ独りぼっち同士だから、渡しているのに気づいて友達になりたい。
○最初はうなぎを盗って、うなぎを食べさせたかったお母さんが死んでしまったから自分のせいでと思い渡していたが、渡していることに気づいて、兵十に「もう大丈夫だよ。」「ありがとう。」「お礼を言ってもらいたい。」

○今までは、兵十への償いで栗や、松茸を持って行ってけど、今は兵十にとったものをあげたい、食べてもらいたいと思って持っていている。
○自分がうなぎを盗ったことに後悔や責任を感じていて、そのために持っていているのに、神様だと思っているなら、もう持っていくのはやめようかな。
○今まで兵十のために持っていこうと思っていたのに、神様だと思っているのはわりにあわないなあ。

児童の質問

○なぜ、ごんは兵十と友達になりたいと思っているのですか。うなぎを盗って、怒っているかもしれないですね。
○くりを持って行っているのが、ごんだと気づかれたら、本当に友達になれるのかな。

質問に対する答え

○教科書の「おれと同じひとりぼっちの兵十か」の「おれと」の「と」に注目して、ひとりぼっち同士と思え、仲間意識が出てきたと思ったからです。
○ごんの「友達になりたい」という思いが兵十に伝わると思う。
○兵十は誰が持ってきてくれるのか、不思議に思っていたから、知ったら「ありがとう」と思ってそこから友達になれると思う。

ふりかえり

ごんは、いたずらの後、兵十を知っていくことで、兵十への思いが変わっていった。

【B 評価】

☆他者の意見の良いところや、疑問点を書くことができ、自分の意見と比べて書くことができている。

(例) ① ○○さんの「ごんは兵十が独りぼっちだったから友達になりたい」という意見にすごく納得しました。同じ独り者だから、友達になりたいと思ったのかなと感じました。

② △△さんの意見の「後悔から気づいてほしい」という意見と同じ意見でした。最初はごめんねって思うだけで、気づいて感謝してもらいたいという気持ちに変わっていった。

【A 評価】

☆B 評価に加えて、次のような内容が書かれている。

○ごんの気持ちが変わったことでごん自身が「成長」することができた。など話し合った内容をもとに、作品について自分なりの新しい考えを見出している。

○作品を通して、ごんの気持ちの変化を描いた「作者」の新美南吉について自分の意見を書くことができている。

○ごんの行動や思いを自分に置き換えて表現している。(例) ごんのように自分も親に褒めてほしくて、お手伝いしていることに気づいてほしいことがあった。

小金色の深い学び

教師の発問

○神様と思っている兵十に対して、ごんはなんて、次の日もくりを持って行ったのでしょ。
○(ごんの最初の気持ちでなかったら)ごんは兵十のうなぎを盗んだ後、どんな気持ちで栗や松茸を持っていったのかな。
☆ごんの思いは「気づいてほしい」だけかな。

☆ごんは同じ独りぼっちの兵十に自分を重ねて「さみしさ」を初めて知ったからそんな思いも出てきたと思います。
☆ごんは「さみしさ」から、「人のぬくもり」や家族の温かさなどを求めているのではないかな。

(2) 取組みの改善

「ふりかえり」の活動を見取りとして授業改善を進める中、子どもたちが見通しを持ちながら学習でき、教員のねらいに対応した学びの「ふりかえり」ができる「めあて」の提示方法や、自分の考えや集団の考えを発展させることができる話し合い活動の在り方等が新たな課題として見えてきた。

そこで、1時間の授業を構造化し、可視化して分析する必要性から、新しい指導案の型として「コネクトマップ」を提案した。「コネクトマップ」とは、ゴールから逆算して授業を設計し、子どもの思考と学習過程に沿った授業展開を可視化するためのツールである。「コネクトマップ」では、予想される本時の「ふりかえり」や、到達したい子どもの姿が明記されており、授業の評価基準がより明確になっている。

このことにより、授業者はもとより、授業参観者も子どもたち一人ひとりの到達度と、授業評価を効果的に行うことができるようになった。

「コネクトマップ」の例 (4年国語:「ごんぎつね」より)

○「めあて」と「ふりかえり」の間に児童の活動や発問、予想される反応などの授業の流れを、矢印を使って見やすく記載している

○ふりかえりで評価基準を明確にすることで、教員は子ども一人ひとりの到達度の評価と、授業そのものの評価を適切に行うことができ、子どもと教員の両方が学びの成果を実感できる授業づくりを進めることにつながった



←コネクトマップデータ

(3) 今後の取組み

これまでの「国語科を核とする言語能力の育成」に関する研究成果を見取る場として、全学級による公開研究授業を実施する。

ここでは、本市の教職員のみならず広く府域からも参加を募り、より多くの教職員から本研究に対する評価をいただき、より客観的に研究成果を検証したいと考えている。さらに、学識経験者からも指導助言を仰ぐことで、より多面的・多角的に本研究を分析し、今後の校内研究に生かしたい。

また、今回の効果検証自体も学校における研究活動のPDCAサイクルの一部と捉え、今後の校内研究活動のさらなる推進・改善を図っていききたい。



2. 学園システムの改善・構築

(1) 4・3・2制の導入

小中一貫校「彩和学園」の開校に伴い、今後、抜本的な学園システムの改善に取り組む。

まず、児童生徒の発達段階を踏まえた9年間の区切りを見直し、3区分編成とし、各期を「前期」（1～4年）・「中期」（5～7年）・「後期」（8～9年）とする。ここでは、各区分に適した教育内容・活動の検討を進める他、各期の児童生徒のリーダー性の育成をめざした学習活動・学校行事を開発する。特に、現在、多くの中学校で課題となっている、小学校での指導方法や生活環境の違いによる不安、いわゆる「中1ギャップ」による不登校等にも対応できるよう、特に中期の充実にいち早く取り組みたい。



(2) 授業スタイルの統一

現在、小・中学校での授業スタイルの統一を進めており、とりわけ「めあて」の提示と「ふりかえり」活動の実施については、子どもたちが学びを実感でき、教員は自身の授業改善にも生かすことができることから、1年生から9年生まで全ての学級で実施している。

また、授業での発言の仕方や話し合い活動の在り方等についても系統的に積み上げられるよう、小・中学校で授業を公開できる日程を常に共有し、相互参観を平常化することで、指導方法の共通理解や指導内容の系統化についての論議が日常的に行える環境を整備している。

さらに、小・中学校の学びをつなぐため、中学校教員による小学校への乗り入れ授業を実施している。現在、高学年の算数科や理科、家庭科で実施しており、進学する前の中学校教員との関係づくりや、中学校教員の児童理解につながっている。また、乗り入れ授業の効果検証から、今後、取組みを進めていく4-3-2制による「中期」の充実につなげていきたい。



Topics

<市教育委員会による支援>

～公開授業による発信・共有～

小金台小学校の研究成果が授業場面でも実感できるように、12月に全学年による公開授業を実施した。広く府域からも参加者を募り、本市の学校においては悉皆の研修とした。

公開授業後には参加者から授業に対する率直な評価をいただき、これを授業づくりにおけるPDCAサイクルの「C」として捉え、今後の「A」につなげられるよう取組みを進める。



富田林市の小中一貫教育

小・中学校が、めざす子ども像(こんな子どもに育ってほしいという学校の願い)を共有して9年間を見通したカリキュラムを編成し、系統的な教育をめざすのが小中一貫教育です。
本市教育委員会では市協定方針に基づき、小中一貫教育を実現するための研究・実践を進めています。

なぜ今、小中一貫教育なの？

本市ではこれまで、小・中学校の教員間の情報交換や交流を通じて、小学校から中学校への滑らかな接続をめざし、子どもたちへのきめ細やかな支援を図ってきました。小学校と中学校の間には、教育内容や教員の指導方法の段差が生まれています。また、子どもたちの心の内面が大きく変化する時期に重なります。「中ギャップ」とも明ばれる、この学習や生活上の段差を軽減し、確かな学力をはじめ、これからの時代に求められる**真貴・能力を育成**することを目指して、市内すべての学校において小中一貫教育の研究・実践に取り組んでいます。

どんな取組みを進めているの？

令和3年度より、小金台小学校・明治池中学校をパイロット校と位置づけ、次のような取組みを先導的に進めています。

- まず、小・中学校でめざす子ども像を共有しました。そして、9年間で育てたい力を明らかにしてカリキュラムをつくっています
- 子どもたちの学習のつま先きを小・中学校の教員間で共有し、指導の改善に活かしています
- 小学校高学年から教科担任制を取り入れて、より専門的でわかりやすい授業をめざしています
- 小・中学校で生徒指導の考え方を共有し、新しい学校生活ルールづくりを進めます
- 障がい理解や支援策の共有により、支援教育を充実させます
- より系統的な教育を実現するため、4・3・2制の研究を進めています

このような取組みを通じて、

- ▶確かな学力の育成
- ▶多様で幅広い人間関係の中で、責任感や自己有用感の育成
- ▶安全で安心な進学による不登校の減少など、未来を生き抜く力の育成をめざしています

今後、市内全中学校区で小中一貫教育の取組みを進めていきます！

富田林市教育委員会

令和3年度の研究のまとめとして令和4年3月に市教委でリーフレットを作成し、これまで小金台小学校が小中一貫校立ち上げに向けて研究を進めてきた「9年間を見通した教育ビジョン」、「小中一貫校で期待する教育効果」、「新教科 未来科」に関する今後の方向性をまとめ、広く市域に発信した。

リーフレットデータ →



(3) 学園協議会の設置

小・中学校の既存の学校協議会を基盤として、新たに「学園協議会」を設置し、学識経験者や地域人材等の知見を生かして教育課程の実施状況を客観的に評価し、その改善を図る体制を整えた。

現時点では小・中学校それぞれの学校協議会も併設しているが、今後の一体化に向け、今年度の実施状況をふまえて改善を図っていく方向である。

「学園協議会」の設置により、学園の様々な取組みに外部人材の知見を活かすだけでなく、学園運営における最も大きなPDCAサイクルの「C」の信頼性向上を図った。さらに、学園の運営に地域の声を積極的に生かすことで地域に根ざし、地域とともにある学園づくりを進めている。

学園協議会の様子



Topics

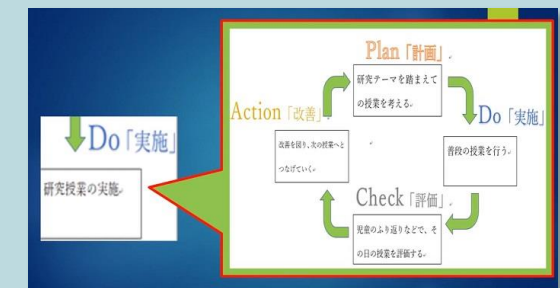
<市教育委員会による支援>

～ヒアリングによる普及状況の確認～

～夏季教職員研修による発信～

令和4年8月に富田林市主催の夏季教職員研修における悉皆研修として、小金台小学校で研究を進めているカリキュラム・マネジメントに係るこれまでの成果を発信した。受講した教職員からは、「これまで分かっていたつもりだったカリキュラム・マネジメントについて、正しく理解する機会を得た。」「目的を達成するために目標を立ててPDCAサイクルを回す必要性を感じた」等の感想が寄せられた。

富田林市主催の学力向上ヒアリングでは、各校の学力向上に係る取組みの他、本市のフラッグシップ校である小金台小学校が発信しているカリキュラム・マネジメントに係る各校の状況についても聞き取るようにしている。そこでは、小金台小学校の実践もさることながら、どのような組織を構築すれば効率的にPDCAサイクルが回せるようになるかについて助言し、この組織づくりが子どもの成長とともに喜び合える教職員集団の形成につながることを伝えるようにしている。

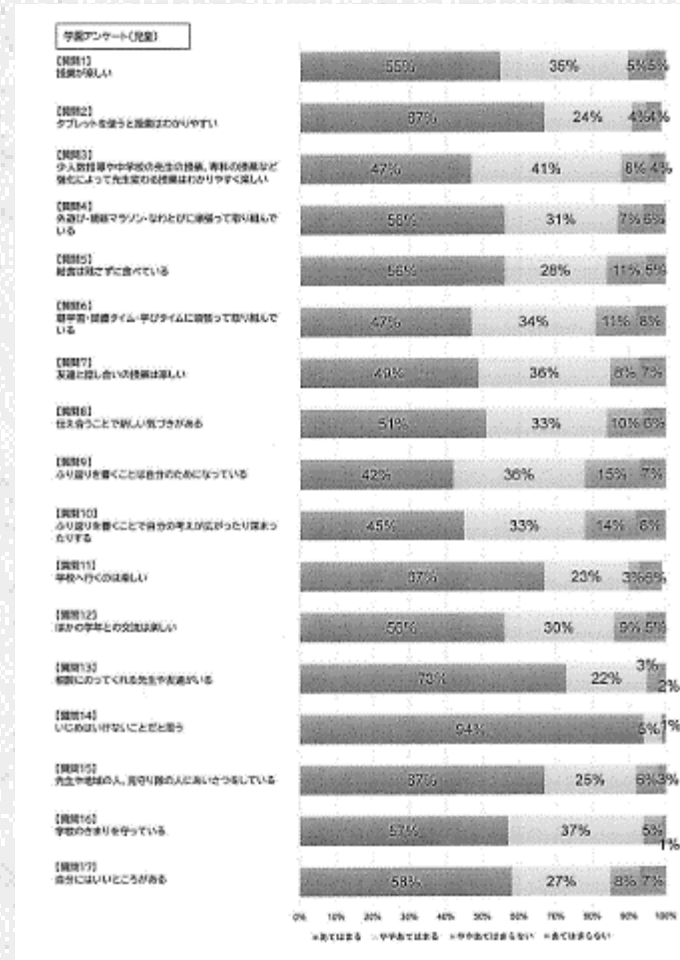


(4) 学園アンケートの実施

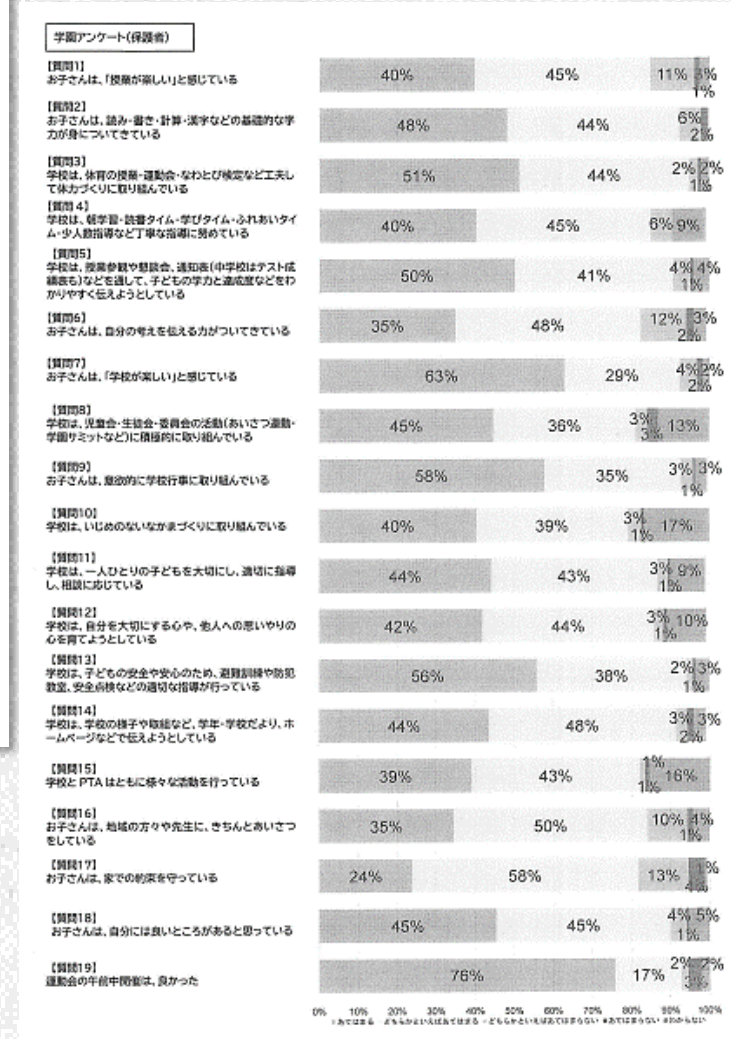
令和4年度より新しく学園としてスタートし、当初に計画した様々なプランを実践している。その中で、現在までの取組みに対する評価を、アンケートで実施する。

対象は、教職員・保護者・子どもで、授業に関することや学校生活に関すること、学園運営や小中連携に関することなど、様々な観点から、現状の実態を把握する。アンケートの結果から考えられる成果や課題の検証を行い、次年度のプランニング作成につなげていく。保護者へのアンケート結果について、成果としては、「基礎的な学力が身につけてきている」や「学校が楽しい」などに関する項目で肯定的な回答が多くみられた。また、自尊感情についても肯定的な回答が見られた。前年度、自尊感情に関する項目において肯定的な回答は、80%未満であった。学園として進めている様々な取組みの成果が出たと考えられる。

課題としては、「授業が楽しいと感じている」や「いじめのない仲間づくりができていない」に関しては、期待していた数値よりも低かった。次年度は、この点を意識した教育計画を作成していく必要がある。



←アンケート項目データ



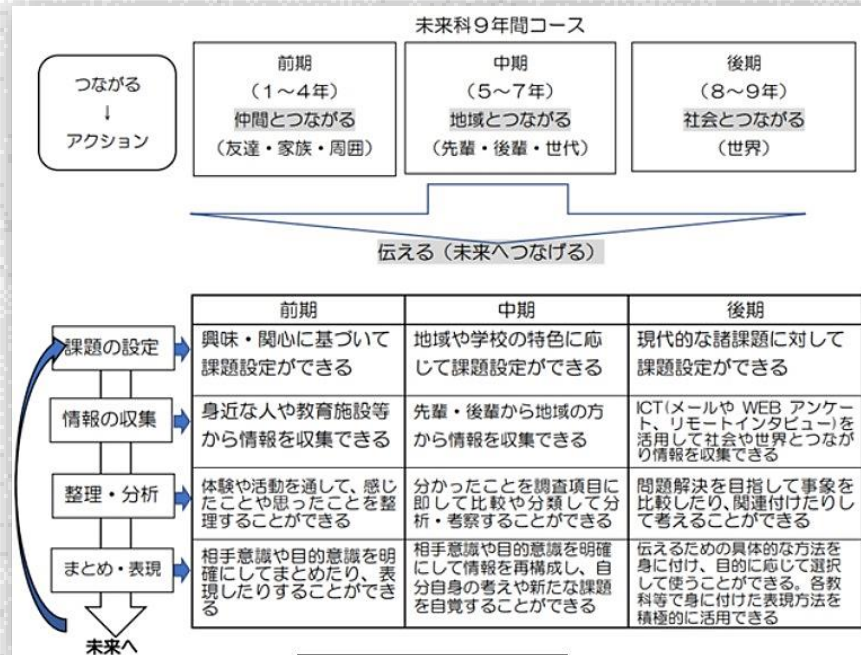
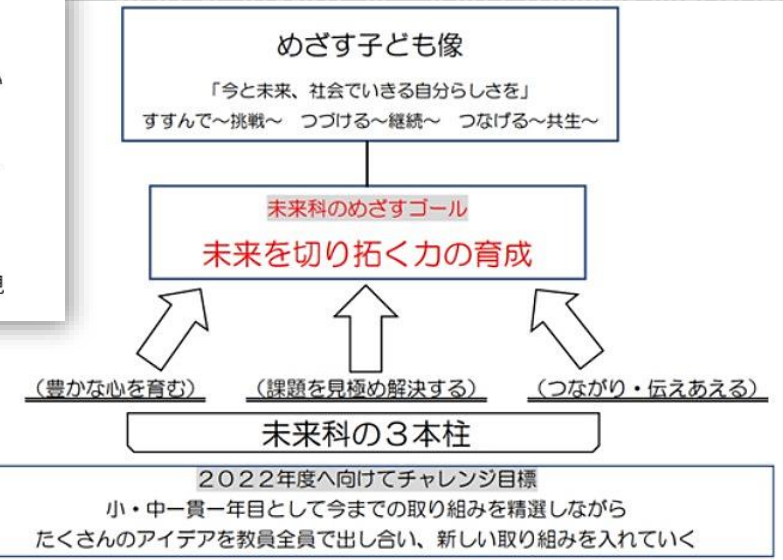
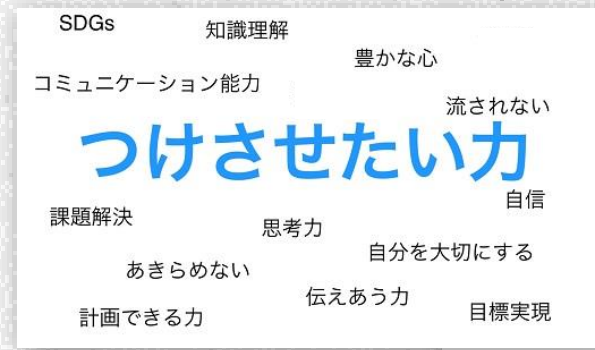
3. 「未来科」のカリキュラム開発と実践

(1) これまでの取組み

小・中学校で子どもたちにつけたい力を共有し、めざす子ども像を具現化するためには、生きて働く学力を育む必要があり、その活用の中核を担う教科として、生活科と総合的な学習の時間を再編成した新カリキュラム・「未来科」の開発を開始した。

実態調査としてアンケートを実施した結果、「自分には良い所があると思う」という設問に対する肯定回答率が7割に留まり、自己肯定感の低さが露呈した。「未来科」では、このような子どもたちの課題解決も踏まえ、小・中学校が一体となった異学年交流を幅広く取り入れ、ピアサポートを通して、自分は必要な人間なのだという自己有用感の向上につなげることもねらいとした。

次いで、未来科のグランドデザインを考案し、めざすべきゴールを「未来を切り拓く力の育成」と設定した。また、学園として9年間を見通した各期別のテーマを設定し、前期は「仲間とつながる」、中期を「地域とつながる」、後期を「社会とつながる」とし、学年が進むにつれて対象の視点を広げられるよう構成した。さらに、「未来科」でつけたい力が可視化できるよう、構造図を作成し、そこから各学年の年間計画を作成した。



学園のめざす子ども像を軸に、未来科のゴールや3本柱、今年度のチャレンジ目標について記しています

未来科のグランドデザイン(前期・中期・後期にそれぞれつけたい力を観点ごとにまとめています)

(2) 未来科のスタート

① 小中合同集会

小中一貫校を開校して初めての学園生全員による、合同集会を実施した。集会では、小学校の児童会と中学校の生徒会が協働して司会進行を務め、学年毎にこれからどんな学園にしていきたいか抱負を発表した。その後、全員が入り混じってレクリエーションを実施する中で、徐々にこれまでなじみのなかった子どもどうしがつながっていった。また、中学生が小学校低学年の児童に優しく接する場面もあちらこちらで見られ、この集会を通して、子どもたちは「今まで別々だった小学校と中学校が 本当に1つの学校になったんだ」という実感を持つことができた。

② 平和学習の交流

9年生が長崎への修学旅行で実施した平和学習の中で、折り鶴を捧げる場面があり、その折り鶴作りに小学校で平和学習に取り組んでいる5・6年生も協力した。修学旅行後には、9年生の「修学旅行・平和学習報告会」に5・6年生も参加し、9年生の生徒会が修学旅行で学習してきたことをわかりやすく説明する中、5・6年生は9年生と協働したこともあり、平和の大切さについて、実感を伴いながら学びを深めることができた。

① 小中合同集会



1～9年生が集まっての初めての合同集会
運動場は子どもたちでにぎわいました

② 平和学習の交流



折り鶴の贈呈(折り鶴は、平和学習の一環として5・6年生も作成しました)

彩和学園スローガン

～一人ひとりの彩りを自分らしく輝かせ、
仲間や地域の和を育む学園～



中学校の生徒会による学園スローガンの発表



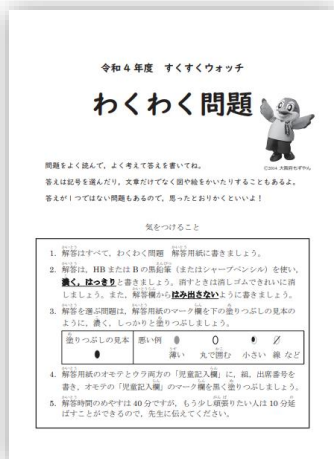
9年生による平和学習の報告会の様子

(3) 今後の取組み

未来科については、今後、その探究的な活動を通して身につけたい力の見取りを工夫しながら確立していく必要がある。とりわけ、未来科を通して育みたい資質・能力である問題発見・解決能力や情報活用能力、また、他教科と関連させながら高めていきたい言語能力についてはその評価を可視化していきたい。

現段階では、これらの資質・能力を評価する手立ての一つとして、大阪府が実施している「すくすくウォッチ」の「わくわく問題」の活用を検討している。また、「わくわく問題」の問題自体も探究的な活動が取り上げられており、今後の未来科の取組みのヒントとなると捉えている。

今後は「わくわく問題」の結果を精査し、活用方法を工夫することで、未来科のカリキュラム・マネジメントに活かしていきたい。



小学校 5 年生・6 年生、保護者のみなさんへ



令和 4 年度

『すくすくウォッチ』を行います

大阪府教育委員会

児童のみなさんへ

- 『すくすくウォッチ』とは、一人ひとりが持っている良いところや、がんばるところをあなた自身やお家の方、先生に知ってもらい、あなたを応援する取組みです。
- そのため、いろいろな問題やアンケートに挑戦してもらいます。あなたの考えやアイデアをどんどん書いてください。
- 一人ひとりに結果を届けますので、その後の道しるべにしてください。

実施内容

- 問題とアンケートの実施期間 令和4年4月18日(月)～4月26日(火)まで
※学校が実施する日を決めます。
- 問題とアンケートの内容
 - ◇わくわく問題(教科横断型問題)【5・6年生】(時間は40分～50分)
 - ・文章や絵、図、表、グラフ、ホームページなどを読んで、自分の考えを書くなどの問題です。
 - ・答えは記号を選んだり、文章を書いたり、図や絵をかいたりします。答えが1つでないものもあります。
 - ◇教科の問題(国語・算数・理科)【5年生】(時間はそれぞれ20分～23分)
 - ・4年生までにそれぞれの教科で学習した内容の問題です。
 - ※6年生は全国学力・学習状況調査に挑戦します。
 - ◇児童アンケート【5・6年生】(時間は20分程度)
 - ・あなた自身のことや、学校やふだんの生活のことなどについて質問します。
 - ・正解もまちがいもありませんので、自分の考えを答えてください。
- ウォッチ・アンド・ドウ
 - ・問題とアンケートの結果は、「ウォッチシート」にして一人ひとりにわたします。
 - ・あなたの良いところやできているところ、また、これからがんばっていくためのアドバイスが書かれているので、よく見て(ウォッチ)、目標に向かって取り組んでいきましょう(ドウ)。

保護者のみなさまへ

『すくすくウォッチ』は、子どもたちに、各教科の学力に加え、ことばの力や文章や情報を読み取り考える力、様々な情報を活用する力、そして、「見えない学力」と言われるねばり強さや好奇心などを育む、大阪府としての取組みです。お子さんが「ウォッチシート」を持ち帰りましたら、ぜひ、お子さんの良いところをほめてください。そして、できればアドバイスを見て、その後の目標と一緒に考えてみてください。



▲小学生すくすくウォッチ
(大阪府HPにアクセスできます)

令和4年度「すくすくウォッチ」について(大阪府HPより)